

のE・オズボーンは、女史の活動に感動、その児童書コレクションをトロント公共図書館に寄贈した。児童文学研究者の必読書となっている女史の『児童文学論』（一九五三）は、古典の重要さを繰り返し述べ、児童文学も大人の文学と同じ基準で批評しようとしている。

（桂 審子）

七

スロボトキン ルイス Louis Slobodkin 一九〇三—七五 アメリカの作家、挿絵画家。はじめは彫刻家だったが、エヌテスの『モファットきょうだい』（一九四二）の挿絵を手がけたのをきっかけに、子どもの本の仕事に転じる。挿絵の代表作にサーバーの『たくさんのお月さま』（一九四三）、エヌテスの『百まいのきもの』（一九四四）、自分で物語を書いたものに『りんごの木の下の宇宙船』（一九五二）などがある。作風は温かく、親しみやすい。

（脇 明子）

スワン アンニ Anni Swan 一八七五—一九五八 フィンランドの作家。児童・青少年向け文学の先駆者。『Satu ja I』おとぎ話集（一九〇一）から『Kotuuoren satu ja tarinointi』コタウオリの物語（一九五七）まで一〇冊を超える作品集は、明るい現実肯定、人道主義、堅苦しくない理想主義に貫かれ、古典として愛読されている。『波の秘密』『不思議の花』『ペトリと魔法使い』は邦訳がある。翻訳や児童雑誌の編集にも関与。一九六一年にアンニ・スワン賞が制定された。（稲垣美晴）

生活綴方 （すいせいかた） 歴史的に特異な性格をもつ日本の公教育制度の内部に一九三〇年代に発生し、発達して今日に至っている日本生まれの教育方法に与えられている呼称。その方法が、散文、詩などの文章表現指導の過程を含んでいところから、その実践者の中に、教師や社会運動家だけでなく、児童文学や文学を論じ、かつはこれを実践するものが現れることになった。その方法上の特徴は、子どもや青年に、生活に取材したひとまとまりの文章を手順をふんで書かせ、さらにはこうしてできた作品を文集に編集してこれを学級や集団の仲間たちの間に発表させ、討論させ、考え方せることをもって一つの教育の成立とする点にある。指導原理としてはリアリズムを志向し、指導形態としては国語科作文にとどまらず、各教科にこれをもち込んで、子どもにひとまとまりの母国語の文章を書かせることの大切さをその指導過程上とりたてて重視すると

いう形をとる。表現形態として詩型をとるものとくに生活詩といい、大人を対象とするものを生活記録と呼ぶ。生活綴方の実践には、地域や時代によって少しずつ違いがあり、戦前（一九三〇年代）に東北地方一帯に一つのまとまりをもつて広がったそれを、「北方教育」と呼ぶ場合がある。また生活綴方の実践によってできた文章作品を生活綴方と呼ぶ場合もある。

【参考文献】日本作文の会編『生活綴方事典』（一九五八 明治図書）、同上編『講座生活綴方』全五卷（一九六一～六二 百合出版）、中内敏夫『生活綴方』（一九七六 国土社）（中内敏夫）

生活童話 広義には、空想的な童話に対して子どもの日常生活を写実的な手法で描いた作品を指すが、狭義には昭和六、七年から一〇年代のプロレタリア児童文学の後退期に、塚原健二郎、横本楠郎らによって提唱された。児童の生活を社会的連帶の視点から描こうとした一群の作品を指す。この場合は生活主義童話とも呼ばれる。横本の評論集『新児童文学理論』（一九三六）は、生活主義童話の代表論集であり、作品としては横本自身の『掃除当番』『原っぱの子供会』、塚原健二郎の童話集『子供図書館』（三九）、川崎大治の童話集『太陽をかこむ子供たち』（四〇）などがあげられる。これらはプロレタリア児童文学のいわば転向形態として発生し、それに続く下畠卓、岡本良雄らの作品にも影響を与えた。

（藤田のぼる）

聖書物語 子どものための聖書物語はイギリス一七世紀にはじまる。その前提として一六一一年の欽定訳聖書が出たことによって、子どもたちが聖書の物語をはじめて全体的に知りうるようになつたことがあつた。子どもも原罪を免れないと考へたピューリタンは宗教教育に熱心であったから、聖書の教えをわかりやすく子どもに与える試みに精を出した。ナサニエル・クロウチの『Youth's Divine Pastime』若者の神聖な楽しみ（一六九一）やベンジヤミン・ハリスの『The Holy Bible in Verse』聖書（一七二九）はいずれも子どもの記憶を助けるために韻文で書いているのが特徴である。やがて挿絵のついた聖書が刊行されるようになる。エリシャ・コールズの『The Youth's Visible Bible 若者のための日に見える聖書』（一六七五）がその早い例である。イギリスで最初の子どもの本の出版社をはじめたニューベリーも挿絵入りの聖書や小型本の聖書を出すなどして、子どもの読者の興味を惹こうと努めている。一九世紀初頭にはチャップマンの聖書が出回る。『The New Pictorial Bible 新しい絵入り聖書』（一八一〇）は聖書のよく知られた部分に木版画の挿絵をつけたものであつた。チャップマンには、聖書の物語をわかりやすく書き直したものも含まれていた。日曜学校運動の推進者トリマー夫人は、聖書に挿絵をつけることに対し反対し『Sacred Story』

「)を著したが、一方で聖書の物語を銅版画にして、物語は別に本の形にして添える試みもしている。一九世紀には家族用聖書が数多く出版されたが、たいていは挿絵つき、質問つきのものであつた。一九世紀に、聖書を子ども向きにやさしく書き直したのはフェリックス・サマリーで、『Bible Events』聖書の出来事』(一八四三)がある。二〇世紀の例としては、子どものための詩人として有名なデ・ラ・メアの『聖書物語』(一九二八)、ターナーやティキンソンの『City of Gold and Other Stories from the Old Testament』聖書物語』がそれである。前者は一九六八年出版、後者は八〇年度のカーネギー賞を受賞している。

(猪熊葉子)

世界お伽噺^{せかいおと} 世界の民話・昔話のシリーズで全一〇〇編。博文館発行。一八九九年(明32)~一九〇八年(明41)。昔話を集めた『日本昔噺』、史実・伝説を集めた『日本お伽噺』各二四編とともに巣谷小波の代表的な再話の業績といえる。欧米の類書からの取材で、依拠した原書名などが記載されている。ドイツ、ロシアの作品が比較的多い。スケールの大きな話の筋をとり、自由に再話したこと、途中でかな遣いを変更したことなどが第一〇〇編の文章にある。この後『世界お伽文庫』五〇編も刊行。

(佐藤宗子)

実用的概念。「世界」「児童文学」「全集」の中味は多様である。全冊の中で地域の割り振り優先か、作品重視か、昔話・民話中心か、古典童話か、新しい作品主体か、冊数や大きさの決まつた全集か、ある趣旨のもとの継続的シリーズか、といった企画の違いだが、そこに刊行時の、ひとまとまりとして捉えた児童文学に対する意識を読みとれよう。また明治期の『世界お伽噺』(博文館)、大正期の『世界童話集』(春陽堂)は、それぞれ巣谷小波、鈴木三重吉という個人再話者の手になる点で注目される。なお大正期にはすでに多くの全集が出たが、『世界童話大系』(近代社)、『模範家庭文庫』(富山房)は大部で堅牢な造本である。『少年少女名著大系』(金の星社)のように雑誌掲載と連動する場合もあつた。全集は長さの制限からも抄訳・再話されることが多く、第二次世界大戦後も事情は変わらない。抄訳・再話の代表に『世界名作全集』『少年少女世界文学全集』(講談社)があり、完訳をめざしたものは、各国文学が多く訳者となつた『岩波少年文庫』(岩波書店)、『世界少年少女文学全集』(創元社)など少数である。最近は外国出版社と提携した『国際版』や他メディアとかかわる『アニメ全集』が増えた。いわゆる「和文和訳」も多く読者数が多い割りに軽視されてきたが、あるセツトの中で何を読ませよう?と意図しているかを測ることから児童文学観を捉え、児童文学史のある側面をみると

ことができよう。

世界少女文学

ぶんかいじょうじょ

(佐藤宗子)

世界少年少女文学全集（せかいわせんじょしゅわんじゅう）第一部全五〇巻、第二部全一八巻、創元社刊（第二部は東京創元社）。世界の神話、昔話、古典、児童文学の名作および一般文芸作品のうち青少年向きのものを選び、収録した全集。第一回配本は一九五三年（昭28）五月、第一六巻『ドイツ編3』（ケストナー『飛ぶ教室』高橋健二訳、他収録）で、最終配本（一九五六・一二）第五〇巻『世界学校劇集』をもつて第一部を完結した。引き続き第二部として、第二二巻『イギリス編2』（グレーラム『ひきがえるの冒険』石井桃子訳、他収録）が五六六年一二月に刊行、第八巻『ドイツ編2』（ハウスマン『ハーモニカを持った少年』角信雄他訳、他収録）を五八年五月に刊行、全巻を締めくくつた。再話、翻案もので終始した叢書が多いこ

世界少年文学名作集（せかいわせんじょねんぱんぐ）児童文学の叢書。大正中期、精華書院内に設けられた家庭読物刊行会より編集・刊行された世界文学名作のシリーズ。一九一九年（大8）七月より第一期一二巻が、二〇〇年より第二期一二巻が刊行された。原作に忠実にという趣旨で翻訳され、それぞれ専門家が担当している。マーカ・トウェイン『トム・ソーヤ物語』（佐々木邦訳）やデ・アミーチス『クオレ』（前田晁訳）など広く知られた作品

の時期に、その規模とともに質の高い翻訳は高い評価を受けた。だが、長編は抄訳を余儀なくされ、また、内容的にも五〇年に発刊した『岩波少年文庫』のように三〇年代の英米児童文学の傑作を紹介するまでは至らなかつた。第一一三二巻まで第二回産経児童出版文化賞を受ける。

世界少年文学

ぶんかいじょうねん

（宍戸 寛）

が多いが、トマス・ヒューズ『トム・プラウンの学校生活』(藤沢古雪訳)や、*シユトルム『人形つかひ』(茅野薰々訳)の選択に独自性があった。また、後年岩波文庫に収められて広く読まれたシユビーリの『ハイヂ』(野上弥生子訳)も、初訳はこの叢書においてであった。

(岡田純也)

世界神話伝説大系 (せかいしんわい) (せつたいけい) この叢書は、『神話伝説大系』として一九二七(昭2)～二九年(昭4)にかけて近代社から刊行された。全四一巻からなり、世界三三地域の神話・伝説を網羅し、アフリカ、日本、イギリシア・ローマ神話には三巻を配している。編著者主幹の松村武雄は、この叢書出版によって、文献に固定した神話伝説と、口伝によつて生きている神話伝説との比較がいかに興味深く面白いものであるかを読者に知らしめ、神話は、歴史的事実と心理的事実の両者を併せ究めてはじめて民衆の実生活に即した文化力としてうかがい知ることができるとして主張した。編者にはほかに中島孤島、藤沢衛彦、中村亮平、井上勇、昇曙夢、内田保、八住利雄が名を連ねている。本大系は近代社以後、数度版元を変えて刊行されたが、七九年名著普及会から近代社版を底本に、『世界神話伝説大系』として復刊された。

(伊達安子)

(一九一六)に続き、自身の全集の負債を返すため一九一七年(大6)四月より『世界童話集』出版の企画執筆をはじめる。春陽堂が高野辰之、吉岡郷甫による西洋日本の『家庭お伽噺』が好調を続ける時に第一編『黄金鳥』(一七)以下『鼠のお馬』『星の女』『青い鸚鵡』『海のお宮』『湖水の鐘』『魔女の踊』『黒い沙漠』『銀の王妃』『馬鹿の小猿』『欲ばり猫』『黒い小鳥』『七面鳥の踊』『大法螺』『一本足の兵隊』『あひるの王さま』『金絲鳥物語』『蟹の王子』『せんたく屋の驢馬』『小鳥と機関車』『象の鼻』(二六)に至る二二編を刊行。流麗な子ども向き文章表現による原作の再話は、三重吉の再創造作品とみることができるだろう。そのうち「赤い鳥」に発表した世界童話作品を合わせて豪華本の『世界童話』叢書第一集『黒い騎士』(二九)をはじめとする『踊の焚火』『湖水の女』『かるたの王さま』がある。これと高野辰之の『家庭お伽噺』が海外名作の翻案紹介の単行本の出現により深い影響を与えた。

(滑川道夫)

世界童話大系 (せかいどうわ) (せつたいけい) 一九二四年(大13)から一八年(昭3)にわたって、世界童話大系刊行会(発行者：吉澤孔三郎)から刊行された世界各国の伝承童話、童謡、寓話、童話劇および近代古典童話の集大成で、全二三

ロシア編、第七卷スコットランド・イングランド編、
 第八卷イルランド編、第九卷フランス・オランダ編、
 第一〇卷インド編、第一一卷トルコ・ペルシャ編、第
 一二・一三・一四卷アラビア編、第一五卷中国・台湾
 編、第一六卷日本・朝鮮・アイヌ編、第一七・一八卷
 世界童話集上・下、第一九・二〇・二一・二二卷童話
 劇編、第二三卷ドイツ・スペイン編。訳者には、山崎
 光子、日夏耿之介、及川恒忠、西岡英夫、竹友藻風、
 金田鬼一、中村白葉、佐々木孝丸、米川正夫、西条八十、
 茅野蕭々など当時の第一人者をそろえ、A5判特
 製堅牢本で一冊平均七〇〇ページに及び、その系統的
 な編集は当時の画期的な出版と評された。その後、構
 成と判型を変えたその普及版が近代社から『世界童話
 全集』として刊行されたが、三一年誠文堂(編集者、松
 元竹二)から『世界童話大系普及版』として構成を変え
 て出版されている。

*世界童話文学全集

せかいどくわぶんが 全一八卷、講談社
(伊達安子)

世界の昔話から古典名作までさまざまな作品を卷

刊。世界の昔話から古典名作までさまざまの作品を卷

ごとに国別、作品別など、織り交ぜて構成。編集委員

は、安藤一郎、大畠末吉ら七名。はじめに『イソップ

童話集』が本全集の第二卷として一九五九年(昭34)九

月に刊行され、全巻が完結したのは六一年(昭36)。本全

集の先輩格、講談社創業五〇周年記念出版『少年少女

世界文学全集』全五〇巻(一九五八)とは編集も訳者も

異にし、独自のカラーを打ち出している。児童文学の
 名作のほかに、短編をきめ細かく多数収録してあるのが特徴。第五卷『イギリス童話集』収録のネズビット
 「かがみの中の子」、デ・ラ・メア『野うさぎとはりねずみ』、アトウオーター『ボッパーさんのペンギン』など、本邦初訳の作品が多い。原則として完訳だが、『二
 ルスのふしぎなたび』など、長編は抄訳である。第八
 回産経児童出版文化賞大賞を受賞した。

(宍戸 寛)

世界の子供

せかいのこどもの 創刊は一九四八年(昭23)三月

号。吉村忠夫編で世界文学社(京都市)発行、A6判縦

型、三〇円、四九年八月まで一五冊を刊行。新時代の

世界的視野と広く豊かな教養を提供した総合雑誌。

翻訳を中心に、各地、各分野の記事を掲載。記事は多く

クリスチヤン・サイエンス・モニターより採用。執筆

者に大山定一、伊吹武彦、菅泰男をはじめ京都大学の

学者や各界で活躍中の文化人が起用された。表紙は小

磯良平他の描く世界の子ども像であった。(斎藤寿始子)

世界名作家家庭文庫

かせいわいふんこ 叢書。一九四〇年(昭15)

秋から翌年にわたって主婦の友社から全一七巻が

刊行された家庭向きの小説叢書(一冊一円~一円五〇

銭)。軍國主義への傾斜の時代を反映して「ファシスタ

党少年読物コンクール受賞作品」と銘打つてイタリア

のファンチユツリ『国旗掲揚式』(柏熊達生訳)が入つて

いるが全体として文学性の高い作品が選択されてい

る。ザルテン『バンビの歌』(菊池重二郎訳)やモルナール『パウル街の少年団』(松室重行訳)、などは、日本へ初訳であるかもしれない。

(塚原亮二)

世界名作全集 古今東西の少年少女向け名作を翻案、再話(または抄訳)した全一八〇冊で構成する叢書。講談社刊。B6判。一九五〇年(昭25)六月に『ああ無情』『宝島』『巖窟王』『乞食王子』(一一四巻)を皮切りに刊行され、六年『かもめ岩の冒險』をもつて終刊した。編集者は不明。再話には、池田宣政(南洋一郎)、江戸川乱歩、佐々木邦、米川正夫、阿部知二など、著名な小説家、翻訳家をはじめ若手の文学者までさまざま分野の人々が当たつた。長編の原作も三〇〇ページ前後に縮約されており、時を同じくして刊行された『岩波少年文庫』(定訳・完訳を主眼)とは好対照を成した。梁川剛一の装丁で親しまれた本集はベストセラーとなり、読売新聞社主催の五〇年度良書ベストテン決定大衆投票児童書の部で『ああ無情』が第二位にランクされるなど広く愛読された。六五~六七年にかけて第二期として同じ作品が別の筆者の再話により(一部同じ著者)全五〇巻が刊行されている。(宍戸 寛)

世界歴史譚 明治期の少年向き外国人伝記叢書。一八九九年(明32)一月から一九〇二年(明35)三月まで全三六冊、博文館刊。A4判一一〇ないし一九〇ページ、挿絵各一〇枚前後を博文館系の画家一六名

が分担。被伝者三六名、ビスマルクなどの軍人武将や国王が最も多く、グラッドストーンなどの政治家がこれにつき、マホメットなどの宗教家、孔子などの思想家、シェークスピアなどの文学者、クックなどの探検家、ニュートンなどの科学者で、女性はジャンヌ・ダルクのみ。いずれも英雄譚の傾向が強く、欧米人が大半を占め、中国系が七名、ほかが四名であった。著者は全員東京大学文科または法科卒、「帝国文学」会員が半数を超えていた。第一巻高山樗牛『釈迦』が最も好評で、大正期まで各版を重ねた。歴史の見方に優れる幸田成友『歴山大王』、桐生悠々『コロンブス』、人間味あふれる松岡国男(柳田國男)『クロムウエル』、酒井小太郎『ガーフィールド』、物語性に富む上田敏『イエス』、中内蝶一『ジヤンヌ・ダーグ』がよい。

(勝尾金弥)

瀬川昌男 一九三一~(昭6~)作家、解説家。

東京に生まれ、一九五四年東京教育大学心理学科を卒業後、科学解説と少年向きSF小説に手を染め、

長編『火星に咲く花』(一九五六)で我が国の児童SF界をリードした。代表作『白鳥座61番星』(六〇)をはじめとする宇宙SF諸作は科学面の正確さにおいて他の追随を許さない。解説書に『天体観望の科学』(七一)、『魔神からマシンへ』(八五)などがある。

(柴野拓美)

瀬川康男 やすお 一九三二~(昭7~)画家、出

版美術家。愛知県岡崎市に生まれる。少年時代より絵を描くことが好きで、一三歳の時に近所の日本画家に一年間、絵の手ほどきを受ける。一九五〇年ごろ上京し、東京芸術大学の受験に失敗。以後、独学で絵を描き続ける。肺結核で約四年間の闘病ののち、当時創刊間もなかつた福音館書店の月刊絵本「*こどものとも」の編集長、松居直に見いだされ、六〇年、「きつねのよめいり」の絵を担当、これが絵本の处女作である。六年絵本『ふしきなだけのこ』(松野正子作)を発表、この仕事によつて六七年、第一回B.I.B世界絵本原画展でのグランプリを受賞した。以後、海外での高い評価を受け続ける。代表作としては『やまんばのにしき』(一九六七)、『ぼうさまの木』(七二)、『おおさむこさむ』(七二)、『鬼』(七二)、『ことばあそびうた』(七三)、『西遊記』上・下巻(七五、七六)などがあり、歌留多作品に『犬棒かるた』(七五)がある。

(小西正保)

関口安義

せきぐち やすよし 一九三五(昭10) - 近代文

学・児童文学研究家。埼玉県越谷市に生まれ、早稲田大学大学院文学研究科(博士課程)修了。都留文科大学教授。芥川龍之介、豊島与志雄、宇野浩二、松岡譲ら

の作家・作品研究と児童文学の研究には定評があり、『豊島与志雄研究』(一九七九)のほか、『日本児童文学大系27』(佐藤義美)、(七八)の編集解説、および「赤い鳥」「童話」に関する論がある。『文学教育の課題と創

造』(八〇)、『国語教育と読者論』(八六)の著書もある。

(菅野圭昭)

関 敬吾 けいご 一八九九(明32) - 民俗学者。

(菅野圭昭)

長崎生まれ。東洋大学でドイツ文学を専攻。東京学芸大学教授。一九二八年ごろ、柳田國男を知り、榎木敏のペネームで、故郷島原の伝説などを発表。三五年『島原半島民話集』を本名で公刊。三六年『昔話採集手帖』を柳田と共に編んで公刊し、日本における昔話研究の道を開拓する。以後、昔話および民俗学の研究を発表。ドイツ、ヨーロッパのその分野の紹介に努める。五〇年『日本昔話集成』第一部動物昔話を公刊。五八年、全六巻を完成。柳田の「完形・派生」二分類論に対し、「動物・本格・笑話」の三分類論を提示。世界の研究の流れを受容。本書はその後、増補され、『日本昔話大成』全一二巻となつたが、分類および話型番号は保持され、今日の日本昔話研究の基礎とされている。七七年『日本の昔話—比較研究序説』により柳田賞受賞。そのほか、日本昔話の系統について多くの業績をあげる。数度の病を克服して研究を続けていた。日本口承文芸学会初代会長。

(小澤俊夫)

関根栄一

えいいち 一九二六(大15) - 詩人。埼

玉県川越市に生まれ、私鉄労組役員などを経て文筆活動。一九七一年NHK放送に『おつかいりさん』『ころぎ』などを発表して以来、研ぎ澄まされた感性と

知性により、戦後童謡の代表的な秀作を数多くつくる。その間詩人グループ「6の会」を結成、童謡運動にも精力的に活躍。童謡詩集に『おつかいありさん』（一九七五）日本童謡賞・赤い鳥文学賞特別賞、『にじとあつちやん』（八六）合唱曲、歌曲、絵本も多い。

鶴見正夫

関根 弘 ひろし 一九二〇～（大9） 詩人、評論家。東京浅草生まれ。第二寺島小学校卒。詩集『絵の宿題』（一九五三）、『阿部定』（七一）、詩論集『狼がきた』（五五）、ルポルタージュ『鉄一オモチャの世界』（五五）、『わが新宿』（六九）など。自伝に『針の穴とラクダの夢』（七八）。なお『関根弘お伽噺集』（七四）は大人の寓話集。文業は小学四年時に父の友人大河原浩の勧めで『少年世界』『少年戦旗』に綴方、詩を投稿して掲載されたことにさかのぼる。児童文学の直接の成果は、戦後の著書に分載された童謡・メルヘン・エッセイの数編である。作風は即物性と庶民感覚に加えて、小学校卒業以来の肉体労働生活に鍛えられた抵抗精神がもしまえで、一九六〇年代の安保学生闘争への共感から代表童謡『死んだ不ズミ』の美感に至るまで通底する。

関野嘉雄

せきお

一九〇二～六二（明35～昭37） 視聴

（宮崎芳彦）

セキヒテオ
覚教育研究家、児童文化研究家。京都市生まれ。一九二七年東京帝国大学文学部美学科卒業。一五年間、東

京市教育局社会教育課に勤務、「児童映画日」の運営や、講堂映画会の推進などに当たる。のち、日本少国民文化協会、日本映画社、大日本映画教育協会を経て、第二次大戦後は「青少年文化懇話会」に拠って、児童読み物の研究にも取り組む。映画教育、視聴覚教育理論の研究家、指導者としての業績が大きい。『講堂映画会方法論』（一九三七）、『映画教育の理論』（四二）などの著書がある。

関

英雄

ひせき

一九二一～（明45）

児童文学

作家、評論家。名古屋市に生まれたが、父の転職で茨城県潮来や石川県尾小屋鉱山など各地を転々とした幼年時代を過ごす。処女出版『北国の大』（一九四二）に収録されている作品には、当時の思い出が描かれている。一九二〇年の父の入院に伴い東京へ移り、八歳で父を失う。そのため生活は貧しかったが、「幼年世界」を愛読し同誌に投稿した作文が入選するなど、彼の文学的資質は豊かに育つていった。小学卒業後は内閣賞勲局や簡易保険局に勤めながら甲種夜間学校私立立正商業学校に通う。二五年一月雑誌『童話』に投稿した『猫』が子どもの部一席に入選した。そのころから児童文学作家を強く志すようになり、以後意欲的に投稿し、『童話』廃刊まで七回入選。その後投稿仲間の千代田愛三らと同人誌『羊齒』を創刊（二八）。また『童話』の編集者だった千葉省三、酒井朝彦らの同人誌『童話文学』

に『縁側ものがたり』(一九二)が掲載される。夜間学校卒業後、読売新聞社、都新聞社などに勤務。四一年帝国教育出版部に入社して月刊絵雑誌『コドモノヒカリ』の編集に当たる。この年から絵雑誌『コドモノクニ』の常連寄稿家となる。四一年、新児童文化第一集に発表した『北国の犬』を標題として四二年短編集『北国の犬』を出版。四三年幼年童話集『つばめのやくそく』出版。四五年七月から日本少国民文化協会事務局勤務。終戦を迎えて翌四六年から「子供の広場」の編集に従事。同年児童文学者協会設立に参画、事務局長となり、六五年以降理事長を務める。戦後は『銅像になつた犬』(四六)、『三本のローソク』(四八)などテーマ性のある短編や『名たんていカッコちゃん』(五八)、『キツネが走るアタがとぶ』(七六)など興味性のある中編を試みたが、七一年に発表した長編『小さい心の旅』では再び少年期の体験を回顧的に描き、処女童話集『北国の犬』の自伝的作品の系譜をさらに深化させている。児童文学の本領はやはり自伝的作品の系譜にあるといえる。一方、評論活動も活発で、『児童文学論』(五五)、『新編児童文学論』(六八)、『体験的児童文学論』上・下(七一)のほか、「日本児童文学」に掲載した評論など多数。

「小さい心の旅」ちいさいこころのたび 一九七一年。長編少年小説。第一次世界大戦直後に父を失い、震災のあと母とも別

れて他家で暮らすようになった少年が、奉公先や勤め先を何度も変えながら自分らしい生き方を求めて、ついに夜間中学に入学する。自己の八歳から十五歳までの心の軌跡を回顧的に描いた自伝的小説。五六年同人誌「旗」に発表したものの大半に書き直し、七一年単行本として刊行。大正期の苦学少年の生活と心理を典型的に描いた点が評価され、サンケイ児童出版文化賞、日本児童文学者協会賞、赤い鳥文学賞を受賞。

【参考文献】菅忠道『日本の児童文学』(一九五六 大月書店)、西田良子『関英雄解説』(一九七八『日本児童文学大系30』ほるぶ出版)

関屋五十二せきや いそじ 一九〇一~八四(明35~昭59) 口演童話家。栃木県足利郡厨町に生まれる。明治中学から青山学院高等部に進む。青山学院在学中より日曜学校や子ども会での話に情熱を傾ける。一九二五年N H Kに入局、子ども向け番組の制作責任者となる。三年よりラジオ番組「子供の新聞」を村岡花子と隔週ごとに担当、「関谷のおじさん」として親しまれ終戦まで続ける。童話集『笛吹橋』、童話劇集『魔法の鏡』がある。初期の放送児童文化推進者として知られている。夫人は童画家の川島はるよ。

(川上春男)

セギュール夫人セギュール Sophie Rostopchine, Comtesse de Ségur 一七九九~一八七四 フランスの児童文学作家。帝政ロシアの貴族ロストーピンを父と

してペテルブルグ(現レニングラード)に生まれる。一八一六年父に従いパリに亡命、セギュール伯爵と結婚、八人の子を育て多くの孫に恵まれる。いつもお話を語り聞かせていた孫娘がロンドンに転居したのがきっかけで筆を執り、五六歳で第一作『新仙子女物語』(一八五六)を書く。以後一人一人の孫あての献辞のついた作品が十数年の間に二〇巻となる。いずれもアシェット社から出版され、その人気が『バラ色文庫』の誕生に結びついた。鋭い觀察力で日常生活を視覚的に捉えてみせるセギュール夫人の作品は圧倒的に子どもたちの支持を得た。はじめて子どものためにだけ書く作家が出現したのだつた。一人の孫娘をモデルにした『ちつちやな淑女たち』(五七)、作者の少女時代の反映である『ソフィのしくじり』(五九)、動物擬人化の伝統による『学問のある口ばの話』などは、作中の貴族社会の子どもの日常が古風なものとなつた今でも、歯切れのよい会話と快適なリズム、巧みに仕組まれたサスペンスの魅力で読者をとりこにしている。また、少年労働者はじめ多様な社会階層をリアルに描いた『Jean qui gronde et Jean qui rit』ぶつぶつジャンとこにこジャン』(六五)や『La Fortune de Gaspard ガスパールの出世物語』(六六)などの後期の作品群は、へ人間喜劇』のミニチュア版とも評されており、第二帝政期における社会生活に関する証言としても評価されてい

る。

世間話

ばせけん

* (新倉朗子)

口承文芸の一一種の称呼。昔話のようになり口や形式にこだわらず自由に話される。世間話は大きく分けると、村内の話と村外の話との二つの分野に分けることができる。大力女の話、狐や狸に化された話などは前者に属し、実話や体験談として話される。後者に属する話は旅芸人、山伏、巫女、旅職人、行商人など村外から訪れる人々や村から外出して世間を渡り歩いて帰つてくる人々によつて話がもたらされた。

(吉沢和夫)

瀬田貞二 一九一六～七九(大5～昭54)児童

文学の創作、翻訳、評論家、児童文化の研究者。東京

本郷に生まれ、東京大学国文科卒業。在学中に中村草

田男を知り、戦後草田男の主宰する俳誌「萬縁」の編

集、公立夜間中学の教師のかたわら余寧金之助の筆名

で句作や児童文学の創作に筆を染める。一九四九年平

凡社入社、「児童百科事典」全二四巻の編集長として児

童文化に対する自らの理想をその編集に託す。石井桃

子らとスミスの『児童文学論』を訳出、しだいに独自

の児童文学観を確立、その集成は『幼い子の文学』(一

九八〇)、『絵本論』(八五)として歿後に出版された。日

本の子どもの本の流れを幅広い視野ではじめて系統的

に説き明かした大著『落穂ひろい』(八二)で毎日出版文

化賞特別賞を受賞。児童文化史に大きな足跡を残した。

また C·S·ルイス『ナルニア国物語』、トールキン『ホビットの冒險』『指輪物語』や数多くの絵本の風格ある訳文で翻訳家としても知られる。創作『おとうさんのラッパはなし』(七七)、『きょうはなんのひ』(七九)など。その博識と極立った鑑識眼、説得力のある文章で、戦後新しい児童文学の流れを導びき、海外の児童文学の紹介にも先駆的役割を果たした。とりわけ絵本研究と評論の面では戦後の日本の絵本論の流れを方向づける決定的な影響を与えた。一方、近世の子どもの本やおもちゃ絵の収集にも力を注ぎ、実証的な研究に努めた。

(松居直・林早苗)

説教節

うせつきよ

説経節とも書く。古代に仏教の法会

の中で行われていた説経は、公開講演的な性格をもち、法華八講の中でも『法華經』の一巻の精粹部分が解説されても、曲節はなかつたが、説経師が専門職的技量を争い、和讃や平曲の語り口を学び、語りもの化したのは、南北朝時代といわれる。その後樂器として鶯さざなみを取り入れて伴奏に用い、門付けをして歩く門説経も出てきた。一七世紀に入って三味線を取り入れると一大飛躍し、人形操りと結合して興行されるようになつたが、やがて人形淨瑠璃にとつて代わられる。太棹の三味線で豪快ともいわれる語られ方をしたのが、淨瑠璃の織細美妙の語りにはかなわなかつたのであろう。現在では東京の八王子市に車人形や写し絵と結びついたもの

*
ビットの冒險』『指輪物語』や数多くの絵本の風格ある訳文で翻訳家としても知られる。創作『おとうさんのラッパはなし』(七七)、『きょうはなんのひ』(七九)など。その博識と極立った鑑識眼、説得力のある文章で、戦後新しい児童文学の流れを導びき、海外の児童文学の紹介にも先駆的役割を果たした。とりわけ絵本研究と評論の面では戦後の日本の絵本論の流れを方向づける決定的な影響を与えた。一方、近世の子どもの本やおもちゃ絵の収集にも力を注ぎ、実証的な研究に努めた。

が残っている。説教節の詞章は、『愛護若』『山田妻』『梅若』『山荘太夫』『刈萱』『小栗判官』のような名曲を生み、義太夫節・歌舞伎の演目に受け継がれ、『山荘太夫』は森鷗外の小説を生んだ。
(益田勝美)

瀬名恵子 けいこ 一九三三一～(昭七) 絵本作家。

東京都に生まれる。お茶の水女子大学附属高校、セツ・モードセミナー、放送作家協会CM教室を卒業する。幼いころから絵が好きで、一〇代には武井武雄から童画を、また武田雪夫、後藤橋根から童話を学ぶ。高校三年生の時、童画家か童話作家とその取るべき道に迷つたが、結局、絵の方に進む。一九六九年に『いやだいやだの絵本』全四冊という幼い子どものための絵本を発表。オランダのブルーナの『子どもがはじめて使う絵本』(うさこちやんシリーズ)に基づきながらも、それを乗り越えたオリジナリティで、一躍脚光を浴びる。以後『めがねうさぎ』(一九七五)、『うさんごとおばけ』(七七)などを発表する。子どもの心の動きを理解し、子どもの世界にも精通し、それらをすなおに表現している。はり絵を主にした手法も単純でわかりやすい、そして明快な挿絵がその絵本の特徴になっている。

(中川達夫)

セルヴォン ジャクリーヌ Jacqueline Cervon 一九二四一 フランスの児童文学作家。ジブチで教職についたのち三児の母となり、一九六一年ごろから精力

的に書きはじめた。『Ali, Jean-Luc et la Gazelle』アリとジヤン＝リュックとかわしか』（一九六三）など早くから人種差別を排した友愛のテーマを描き続けている。自然環境の変化の原因をたどり過疎の問題を子ども会で話し合った『Benoit et le village à l'envers』ノワとおかしくなった村』（七六）のように、積極的に生きる姿勢を明確に示すのが作風の特徴である。フランス国内での受賞作品が多い。

新倉朗子

セルテン ジョージ George Selden 一九二九、アメリカの童話作家。本名ジョージ・セルデン・トムソン。田舎のコオロギがニューヨークに上京して猫と

ネズミの友人を得る物語『都会にきた天才コオロギ』（一九六〇）とコオロギがその友人を故郷の田舎に招待する続編『タッカーのいなか』（六九）に、もう二編続く連作が代表作。ウイリアムズの挿絵が作品を活気づけている。ほかに『すずめのくつした』（六五）の邦訳もある。

吉田新一

セルティ ケイト Kate Seredy 一八九九～一九七五、アメリカの児童文学作家、画家。ハンガリーに生まれたが、一九二一年にアメリカに移住。編集者の勧めで、ハンガリー農場を舞台とした家庭物語『The Good Master よい地主』（一九三五）と続編『歌う木』（三九）を書く。その後、ハンガリー伝説を題材とした叙事詩

風のファンタジー『白いシカ』（三七）で、その挿絵とともにニューベリー賞を受ける。アメリカにおける移民文学の系譜に入る。

原昌

セレリヤー ヤン Ian Lucien Serrailier 一九二一、イギリスの詩人。教師をしながら詩や散文を発表。『Thomas and the Sparrow トマスと雀』（一九四六）、『Everest Climbed ハーベスト登頂』（五五）など。変

化に富んだ素材、経験に基づく明快な表現が彼の詩の特徴といえる。『銀のナイフ』(五六)は、調査に五年の歳月をかけて完成した物語。妻とともにハイネマン社の『ニューワインドミル』シリーズの編集に携わり、『ベーオウルフ』など再話も手がけている。(田中瑞枝)

全国学校図書館協議会 一九四八年に文部省の「学校図書館の手引」が刊行され、その指導者講習会が奈良と千葉で行われた。これを機に松尾弥太郎らは今後の自主的研究のため、全国的組織の結成を呼びかけ、五〇年に民間の研究団体としてこの会が誕生した。会員は都道府県単位の学校図書館研究団体、賛助会員、特別会員などとなり、会員相互の連絡提携を図り、学校図書館、青少年読書の研究と振興のための諸活動を行い、教育と学術文化の発展に寄与することを目的とする。そのため、機関誌「学校図書館」(月刊)と「学校図書館速報版」(旬刊)の発行をはじめ、調査、研究物の刊行や、学校図書館向け優良図書の選定などを行っている。とくに各地区の学校図書館研究団体の研究援助、諸会議の開催とともに、司書教諭など専門職員制度の確立のため、「学校図書館法」の改正に力を入れてきた。戦後の我が国の学校図書館運動に、少なからぬ影響を与えてきている団体である。

(今村秀夫)

全国昔話記録

せんしょくじゆく

採集昔話の叢書。近代の

(今村秀夫)

日本における最初の昔話資料叢書で、一九四二年(昭17)より四年(昭19)にかけて三省堂より一三冊刊行。叢書全体の編者は柳田国男で、巻頭に置かれた「趣意書」によれば、近代化の進行とともに消失しつつある昔話をありのままに記録し、研究に便ならしめ、民間文学研究に新たな機運をつくろうとして発案された。戦後再興された昔話調査の土台となつた。従来のこの種の記録が、文書資料に頼つたり偶然的な採集により聞いたままを記録することができる採集者が、各頼つたりしていたのを克服すべく、地域的には一郡・一島くらいを単位とし、速記その他の技術により話者卷を担当した。鈴木棠三採録の『佐渡島昔話集』(一九四二)、山口麻太郎採録の『壹岐島昔話集』(四三)、武田明採録の『阿波祖谷山昔話集』(四三)など。続刊を予定されていたが、第二次大戦の激化により中絶。七四年、『日本昔話記録』と改題の上、同じく三省堂より復刻された。

戦争児童文学 (せんそうじどうじゆ) 反戦平和の願いを託した児童文学。平和教育に熱心だった教師たちが、一九六〇年の安保反対運動などを経験する中で使用するようになつた用語である。石上正夫・時田功編著『戦争児童文学350選』(一九八〇)には、「『戦争児童文学』ということばをわたし(石上正夫)が使いはじめたのは、一九

(稻田和子)

すことができる。しかし、これはまったく安易で、不

注意な命名であり、その意図を正しく伝えるには、反戦児童文学、もしくは反戦平和児童文学と呼ぶべきであつた。とくに六〇年前後からの創作児童文学におけるこの分野の作品評価には、戦争児童文学の名称はふさわしくない。反戦児童文学は、古くは小川未明の『野薔薇』(二〇)などがあげられるが、第二次世界大戦後に本格的作品が誕生する。戦後いち早く書かれた竹山道雄『ビルマの堅琴』(四七)、壺井栄の『二十四の瞳』(五二)が先導的役割を果たし、六〇年安保前後から戦後派児童文学作家による反戦平和児童文学が書かれるようになる。右の『戦争児童文学35選』には、(1)戦争時代の国民生活(2)戦争と兵隊・その生と死(3)学童集団疎開(4)日本空襲・東京空襲(5)原爆と人間(6)植民地の崩壊と日本人(7)戦争と記録(8)外国の戦争(9)戦争と漫画(10)戦争と詩の一〇部門に作品が分類されている。いぬいとみこの『川とノリオ』(五二)、今西祐行の『ヒロシマの歌』(六〇)など「原爆もの」に代表されるように、日本人を戦争の被害者として描く作品が多いが、加害者としての日本人に視点を置いた反戦児童文学の必要性も叫ばれている。乙骨淑子『びいちゃん』(六四)、前川康男『ヤン』(六七)、*しかたしん『むくげとモーゼル』(七一)、斎藤尚子『消えた国旗』(七二)などが、そうした視点の採用によつて書かれた作品であ

る。

(関口安義)

センダック モーリス Maurice Bernard Sendak

一九二八～ アメリカのイラストレーター。ニューヨークのブルックリンでボーランドからの移民ユダヤ人の子として生まれた。幼年時代病弱だったモーリスは、孤独で繊細な感性を育てた。アート・スクールで、リーグの夜間部でグラフィックアートを学び、勤め先のショワーツ玩具店で、一九世紀のイギリス古典絵本と二〇世紀のスイス絵本に接し、絵本に興味をもつた。名編集者アーシュラ・ノードストロムの勧めにより子どものことば集『あなたはほるもの』(おっこちること) (一九五一) のイラストレーションを手がけ、高い評価を受ける。この成功を契機に、一〇年間の長い修業時代に入り、五十数冊に及ぶ他人の作品のイラストレーションを手がける過程で、多くの画家、イラストレーターの先達から技法を学び、パステル・シユの才を發揮する。その成果が『ちいさなちいさなえほんばこ』四部作(六二)として結晶する。そして翌年、今世紀の絵本の傑作となつた『かいじゅうたちのいるところ』(六三)を出版した。出版当初は、識者の賛否両論を呼ぶ問題作として注目され、やがて世界の子どもたちの絶大な支持を得た。コールデコット賞を受賞し、国際アンデルセン賞作家賞を作者にもたらす契機となり、一三カ国語に翻訳される。『かいじゅうたち』によ

り絵本作家として不動的地位を築いたセンダックは、会間に意欲的なイラストレーションを他人の作品で試みながら、『まよなかのだいどころ』(七〇)、『まどとのそのそのまたむこう』(八一)で幼児回帰をテーマとする三部作を完結する。センダックの仕事は、イラストレーションにとどまらず、アニメーション映画、舞台芸術に独創的な才能を發揮し、その中から、また『ぐるみわり人形』(八四)のような優れた絵本が生まれてきている。

(渡辺茂男)

弘田龍太郎のみで、先行の『児童芸術講座』(一九三三)とは際立つた対照である。とりたてての「開講趣旨」を示す文章はみられないが、「童話ヲ完全ナル組織的体系トシテ研究スベキ」(第一集巻頭言)方向を求める。『童話の理論』(松村武雄・蘆谷蘆村)、『日本童話史』(中田千畝・藤沢衛彦・山内秋生)、『世界童話史』(蘆谷蘆村(重常))がまとめられ、『宗教童話論』(蘆谷蘆村)、『仏教童話論』(蘆谷・長井真琴・菅原霞村)、『基督教童話論』(蘆谷・上沢謙一・小出正吾)などの各論も合わせて構成された。児童劇・人形劇・口演童話・舞踊などの児童文化関係の論稿も収録された。

(大藤幹夫)

早大童話会

团体。一九二三年(大1)春、学生数名の発起により創立。会長は上井磯吉教授。(英語担当)。実演部と創作部に分かれ、はじめは前者が優勢

宗影
→ ソンヨン

全一二巻。日本童話協

会発行。一九三二年(昭7)から三四四年(昭9)にかけて会員制で頒布。編集は蘆谷蘆村が当たり、同時に中心的執筆者でもあった。内山憲尚、安倍季雄、岸辺福雄らの口演童話系統の執筆が目につく。ほかに巖谷小波、小川未明、山内秋生らの名もある。童話関係の執筆は、